

大腸摘出 直前で、松本医院を受診。
漢方免疫増進治療で、ほぼ完治された方の手記。

「潰瘍性大腸炎・糖尿病手記」

匿名希望 53 歳

2015 年 1 月 16 日

はじめに

わたくしが潰瘍性大腸炎を発症したのは、平成 16 年 8 月で、ほぼ 10 年間この病気と付き合ってきました。この 10 年間でいろいろな薬・治療方法を試してきましたが、途中で二度ほど死にかける経験もしました。

そして平成 25 年 11 月に松本医院で治療を開始し、現在、今までの薬を一切飲むことなく、松本医院の漢方薬だけで快食快便の日々を送ることができております。まだ完治はしておりませんが、今までとは全く違う世界がみえてきました。松本先生に感謝し、現在、潰瘍性大腸炎で不安な日々を送っていらっしゃる方々に少しでも参考にしていただければ幸いです。

※以下の記述は、10 年間の記憶を思い出しながら断片的に記述しましたので、まとまりがなく読み難いかもしれませんがご了承ください。

潰瘍性大腸炎発症

平成 16 年(当時 43 才)、私はそれまで 25 年間吸ってきたタバコをやめて、体重が 80 キロ台から 100 キロ台まで増えました。営業職で日頃からストレスを抱え、タバコをやめたこともあり暴飲暴食で太ったものと思われま。そんな中、夏場になり、下痢が続き、そのうち血便・粘液まじりの便にかわり、腹痛を伴う便意は日に 20 回以上になりました。身近に潰瘍性大腸炎の知り合いがいたこともあり、相談をし、病院を紹介していただき検査をすると、潰瘍性大腸炎の診断がでました。私の場合、身近に潰瘍性大腸炎の方がいたこともあり、癌じゃ無かった安心感だけで難病になったという事の重大性がまだわかりませんでした。

治療開始

検査していただいた個人病院で治療を始めることになりました。最初はサラ

ゾピリンの錠剤とプレドニン（ステロイド錠剤）を処方されましたが、あまり効果がなかったのでステロイド注腸（ステロネマ）を使用しました。注腸の効果は凄く、一週間ほどで血便・粘液が治まり、二週間ほどで便も固形化しました。ただし、注腸の副作用として偏頭痛と神経が過敏になるのを感じました。そのときからバファリンも飲むようになりました。

ここからの3年間は、ほぼ同じ繰返しで、年に3回ぐらい寛解と再燃を繰り返しました。繰り返す度に段々症状が悪化するのを感じました。そのたびに薬の量が増え、注腸をすると直ぐ治っていた炎症が長引き始めました。この頃から、この病気の本当の怖さがわかってきました。そして、いろいろな治療方法や薬を試すようになりました。

ステロイドを長く使いすぎているとのことで免疫抑制剤のイムランを使用するようになりました。これは少し効果がありましたが頭髪が抜けてしまい、営業職の私には死活問題で中止しました。その後、ずっと処方してきたサラゾピリンも偏頭痛がひどいのと尿があまりにも黄色くなり、何かと不都合な面が多く、ペンタサの錠剤と注腸にかわりました。このころ、白血球除去療法（LCAP）も試しましたが、針がとてつもなく太く、本当に痛い思いをしました。そのわりには何の効果もなく、医療費が高額だったことだけを憶えています。（特定疾患の保険証を持っていましたのでほとんど国の負担ですみました。）国の医療費を無駄に使っただけで、製薬会社と病院だけが儲かっているなという記憶だけしか残っていません。

主治医への不信感と病気の悪化

この頃から、この個人病院のドクターに対する不信感が芽生え始めました。話し合っただけで治療をすること無く、全て決め付けて治療され、わたくしの思いは聞いていただけませんでした。こんなことがありました。「この病気で難治性の人、眠りが浅いからだ」ということで、睡眠薬を処方されるようになりました。すると最初は良く眠れましたが、そのうち薬が無いと眠れないような体になりました。もともと良く眠れるタイプでしたが、ステロイドを多用するにつけ興奮してイライラ感が増し、眠りが浅くなりました。どうしても睡眠薬はやめたいと申し出ると、「俺の治療方法に不満があるのか」みたいな高飛車な態度で対応してきました。「病気を治すには、ストレスのかかる今の仕事を辞めるべきでは」とも言われました。

いろいろな不満を抱えながら通院しているうちに、思わぬ出来事が起きました。いつもの様に血液検査を受けて東京に出張した時のこと、地元の病院から電話が携帯にかかってきました。「大丈夫か？意識はあるか？今すぐ救急病院に行くか、地元に戻ってこい」とのこと。話を良く聞くと、血糖値が530、それと筋肉がとける状態にあり昏睡状態になる恐れありとのこと。重要な仕事だった為、仕事を終えて3日後に帰るといったが「今すぐ病院に行かないと死ぬぞ」と言われたのでこの一ヶ月の体調を冷静に振り返りました。ちょうどダイ

エットをしていたので急に体重が減ってきたのはダイエットの効果がでてきたのだと思っていました。そういえば、「足がやたらとつる」、「やたらと小便が出る」、「頭がボーとする」過労とダイエットによる症状かなと思っていましたが、先生の話聞いて合点がいきました。後で妻にいわれましたが、出張前に私の会話は、ろれつが回らず変だったそうです。大切な仕事でしたが命には変えられず、府中の救急病院に緊急入院しました。1週間の入院後、地元の総合病院に戻り、2週間入院しました。トータル3週間入院して、どうにか退院することができました。血液検査の報告を受けたのを最後に、この個人病院の先生とはお会いしていません。というのも血液検査の前に何度かそのシグナルを先生に伝えましたが事務的な対応しかなかったからです。やはり主治医に専門知識は必要ですが、人間としても信頼できる人をお願いするのが一番だと思います。私は、この時点でまったく、この先生を信用していませんでした。

潰瘍性大腸炎と糖尿病の治療

この時点ですでに5年が経過していました。潰瘍性大腸炎の治療は、昔からの知り合いである総合病院の先生に担当していただき、糖尿病は、糖尿病専門の先生にみてもらいました。前回と違い、いろいろと相談しながら治療しました。特に、糖尿病の治療は大変でした。インスリンを使用しながらの治療でしたので、一日5回、朝、朝食前、昼食前、夕食前、就寝前に注射し、その度に血糖値の検査をしました。(低血糖をおこすと大変なのです。)その他に血圧の薬も併用しました。

それと潰瘍性大腸炎の薬(ペンタサ錠剤、プレドニン錠剤、調子悪いとき、ステロネマ注腸)、とにかく薬漬けのような日々でした。そんな中、急にインスリンを出さなくなった膵臓が徐々に回復し、担当の先生からインスリンの分泌が活発になってきていますよといわれました。「一度インスリンの注射をすると、一生インスリンの注射をして、最後は透析をして段々体が弱っていくのだろうな」と想像し、「もうまともな生活は出来ないのかな」と思っていたのですが、「まだまだあきらめてはいけないぞ!」という感情がでてきました。

また、現安部総理が大変な辞任劇の後、潰瘍性大腸炎を抱えながらも活発に活動されている姿をみて、「まだまだ諦めてはいけないぞ。必ず病気は自分で治せる」という意識になってきました。この頃、今から3年前2012年(50才)のことです。

新しい試みと挫折

この時期から潰瘍性大腸炎は国立の大学病院で診ていただくことにしました。というのも、ステロイドをこれ以上使用したくなかったのと、保険適用になったレミケードを試したかった(私の勝手な勘違いで、安部さんはレミケードで元気になられたとおもっていました。)からです。そして、2012年の年末、レミケード治療を受ける為の条件が全て満たされ、2013年レミケードの治

療を始めることになりました。(勿論、副作用のことも説明は受けております。)

年明け、一回目のレミケードを点滴で注入しました。驚くほどの効果がありました。体全体に今までに感じたことの無い壮快さがありました。具体的にいうと、今までずっと冬場は鼻がつまっていたましたが、スキッと通り、それまでの軟便が健康なときの便と同じでふっくらと出てきました。こんな事ならもっと早くレミケードで治療しておけば良かったと思いました。それから2週間後、2回目の点滴をしました。何の異常も無く益々調子良くなり、この選択は間違いなかったなと感じながら3回目、4回目と無事に終わりました。そして、安心して5回目の点滴を受けたとき、異変が起きました。点滴を受けはじめて5分ぐらいして、何か所かが痒くなりはじめました。それから5分位するともう我慢出来ない位の痒みになりました。そして息苦しくなり、血圧が低下していきました。そうです、これがアナフィラキシーショックです。息苦しさと、朦朧とする意識の中 下の血圧が40より下がったのと、何人もの先生があたふたと出入りされていたのが記憶にあります。その後、先生方のおかげでどうにか持ち直しました。これがもし院外で起きていたらと思うとぞっとしました。アレルギーが起きてしまいレミケードによる治療は終わりました。その後、もう一つだけ他の免疫抑制剤をためしましたが、ちょっとした痒みが出て直ぐに中止しました。

これで私が望んでいたステロイドを使用しない治療方法は終わりました。そして担当の先生から「免疫抑制剤を使った治療はもう出来ません。残る手段は大腸の全摘手術しかありませんね、ステロイドを一年以上抜いた今が一番の良い時期です。決断してください。」といわれました。目の前が真っ暗になりました。いままで7年近く治療してきて結局腸の全摘しかないのかと思うと情けなくなり、仕事のこと、家庭のこと、いろいろなことが頭のなかで駆け巡り、悲しくなりました。

松本医院への思い

2013年10月 妻と話し合い大腸の全摘を決断し、会社の上司にも11月には手術、入院をすると報告しました。ただどうしても頭の中で気になることがありました。それは、インターネットの検索で見つけた松本医院の存在です。漢方で潰瘍性大腸炎を治せるという、その信じられないホームページの内容。実は松本医院の存在は遡ること3年、2010年ステロイドの多用でインスリンの分泌が悪くなり糖尿病になったときにインターネット検索し、松本医院の存在を知りました。ホームページに書かれた先生の理論と実績、そして同じ病気を持つ人たちの体験談、どれも4年近く病気を経験したわたしには合点のいくものでした。そこで製薬会社に勤める兄、国立大学病院で医学部助教授として勤める子供の頃からの友人に相談したところ「そんな胡散臭い漢方の治療はやめとけ」と言われ、そのときはまだもっといい治療法、もっと優秀な専門医が存在するだろうと思い選択肢の中から消えていきました。そして結局い

ろいろな治療法を試し、大腸の摘出手術しか選択が無いと言われた中で、頭に松本医院の記憶がよみがえりました。そしてもう一度先生の理論と多くの方々の体験談を読みなおし、「これしかない！」と思いました。病気は自分が作りだすもの。そしてそれを治すのも自分自身である。専門用語もいっぱい有り、難しい文ですが、全て合点のいくものでした。「よし！これでだめなら大腸全摘しよう」と思いました。妻とも話し合ったところ、妻も全面的に賛成してくれました。「よし！大阪に行くぞ！」もう迷いはありませんでした。

松本医院での診察

私が松本医院をおとずれたのは、2013年11月、肌寒くなる時期でした。潰瘍性大腸炎の状態は最悪に近く、トイレは日に20回前後、粘液交じりの血便で、油断すると漏らして血液まじりの粘液が出る状態でした。調べた住所に向かうとイメージどおりの医院で（みなさんの手記でだいたいイメージはできていました）独特の漢方薬の匂いとインパクトのある関西弁がきこえてきました。「さー、はじまるぞ！」早く顔を見たいなと思いましたが、今までの経歴と使用した薬品を思い出しながら書きだし、そして鍼とお灸が始まりました。いよいよ診察室に呼ばれると、そこにはやさしそうな若先生がいらして、今までの経過をヒアリングしていただき、分かりやすく潰瘍性大腸炎についてお話をしていただきました。そして「必ず、治りますから」と力強い言葉をいただきました。そこに隣の診察室から先生が登場されました。はっきりとした強い口調で単刀直入にズバッ！ズバッ！と話していただきました。特に「病気は自分が作るんや。そして治すのも自分自身や。絶対治る」力強い言葉をいただき、今までの辛かった日々を思い出し、熱い思いがこみ上げました。「よし。絶対治してやる！」漢方薬とお灸を処方していただき地元に戻りました。

漢方治療開始

家に帰ると、処方していただいた漢方薬を専用のヤカンでコトコトと煮込み、食前用の薬と食後用の薬をそれぞれ煮出しました。片方はとても苦く、もう片方は甘い漢方薬です。皆さんの体験談では飲み難いという方が多かったのですが、私にはとてもおいしく感じました。そして一週間に一度の漢方風呂、それとお灸です。11月、12月、煙たくてたまらなかったので窓をあけると寒くてたまりませんでした。松本医院で処方いただいてから糖尿病で使用するインスリン以外はすべての薬（アサコール、プレドニン、ステロノマ、緑内障予防の目薬）をやめました。「これでダメなら大腸を切断する」というある意味覚悟ができていました。11月からはじめ、12月が過ぎ、1月の半ばまではそんなに変化はありませんでした。しかし、今まで使用していた薬をまったく飲まずに症状が悪化することなく経過したので、これはいけるぞという感じはありました。そして1月半ばに全身に湿疹が出てきました。特に足のすねとふくらはぎに大きな湿疹がいっぱいできました。ただし私の場合はジुकジुकする様な

湿疹は出ませんでした。また、いままで太っているにも関わらず、手足の先端がやたらと冷たくなり冷え性になっていたのが、ポカポカと暖かくなってきたのがわかりました。1月末には便にも変化が出てきました。便が固形化し、粘液、血液が少なくなってきました。そして2月の中盤には、ほぼ正常な便へと変化しました。3月には完全に普通の便が出るようになりました。今まで何度もステロイドにより普通の便が出ることはありましたが、今までの薬で抑えつけた寛解とは全く違うことは、自分自身一番わかりました。今までだと便がまともになっても、体温が低く（36度前後：10年前は36.8度前後ありました）、神経質になり、妙にイライラしていました。体にかなり無理があったのでしょう。それが今回は精神的にも、肉体的にも自然で心地よく、昔の健康だった頃を思い出しました。それと体がポカポカしてよく眠れるようになりました。この3ヶ月間、特別に食事制限をしたり、酒を止めたりしたわけでもありません。松本医院に現状を報告し、処方していただいた漢方薬をまじめに飲んできただけです。そして血糖値もうまくコントロールが出来るようになり、ついに10月にはインスリンを止めることができ、今では漢方薬以外何も飲んでいません。

11月から1ヶ月半、漢方薬を止めていました。すごく体調が良かったのと、途中で漢方薬を空けるとどうなるのか試してみたいのもありました。結果、年末の慌しさと暴飲、暴食の影響もあり、ほんの少しですが血液と腸の粘膜が固形の便につくことがあります。腹痛はありません。前の再燃期と違うのは、ここから急激に悪くならないところです。心と体を休め、体の免疫力を上げるとまたふっくらとした心地よい便がでます。

現在

2013年の11月、松本医院で漢方薬を処方していただいてから漢方以外の薬品は服用しておりません。そして、去年の3月から粘液まじりの血便は出ていません。（ちょっとした症状はたまにあります。）糖尿の数値も下がり、インスリン注射もなくなりました。それに伴い血圧も下がり、血圧の薬も飲まなくてよくなりました。ただし、もともと自分にあまくセルフコントロールの苦手なわたしは2つ先生との約束を果たしておりません。1つは減量ができず、98kg前後です。これは先生から「おまえ、死ぬ気か？あとは、体重を80kgまで落とせば、全て良くなる！」と言われております。もう一つは「同じ病気で苦しんでいるみんなの為にも体験談を書いてあげなさい」ということです。手記に関しては、「まだ完治してないのに、体験談として大丈夫なのか？」「個人によって症状も違うので大丈夫かな？」といろいろ考えましたが、自分自身、他の人の体験談を読んで決断できたのを思い出し、今回書くこととなりました。

決意表明

「私は、今年（2015年）必ず体重を80kg以内まで落とします！」

先生の教訓

- ・タバコを吸わない
- ・肥えない
- ・ストレスをかけない
- ・免疫を抑えない
- ・規則正しい生活をする
- ・邪悪な心を出来る限り少なくする

を実践し、病気を完治し、健康な日々を過ごします。

「病気は自分が作る。病気を治すのは自分自身。」を肝に銘じ、日々精進します。